

「前事不忘後事之師」を心に刻み、

「日中国交正常化50周年記念 魯迅美術学院 王希奇教授 愛と償いの神戸展」は、9月4日成功裏に閉幕!!4日半で2000名超の来場者!日本のマスメディア7社で14回、中国の人民日報でも報道!!

(1)はじめに

2022年9月29日は、日中国交正常化50周年の記念日です。更に、9月18日は日中15年戦争の発端となった「柳条溝事件」の91周年に当たりました。1931年満州の奉天(現在の瀋陽市)近郊の柳条湖付近で、大日本帝国の関東軍が南満州鉄道の線路を爆破した事件です。関東軍はこれを中国軍による犯行と発表することで、満州における軍事展開およびその占領の口実として利用しました。

神戸展では9月開催に拘りました。当初は9/18開幕、9/29閉幕を予定しました。残念ながら4日半だけの開催でしたが、日中不再戦・恒久的日中友好を心に刻み、故周恩来首相が述べた「前事不忘 後事之師」(意識すると「過去を忘れず未来に活かそう」です)の思いを、一人の日本人として広くお伝えする事ができた絵画展になりました。



(2)最近の国際関係への懸念

米中関係のみならず、日中関係も冷戦期においても冷戦後もソ連・ロシアを牽制する視点から、比較的良好な関係が続いてきました。

しかし中国が、2010年に名目GDPで日本を抜き、2014年にPPP(購買力平価)ベースで米国を抜くと、米国のみならず日本や欧州も中国を敵視する様になってきました。これは米欧日にとって間違った外交姿勢と申し上げたいと思います。

中国は日本にとっても、欧米にとっても大切な貿易相手国です。中国という巨大な生産工場・巨大な労働力市場を味方として活用する事は、コロナ禍で打撃を受けた米欧日の経済にとって肝要でもあり、国益に叶っているはずですが、それにも関わらず日本や欧州の政府は米国政府に追従して、反中国キャンペーンを率先して行っています。この様な反中国の日本政府のスタンスを私は全く理解できません。日中友好の政治交流が狭まってきた今だからこそ、日中国交正常化50周年記念事業として、絵画展という草の根の民間交流に極めて大きな意味があったのです。草の根の民間交流を通して、中国の文化・芸術を理解する事は、日中間の友好関係を維持していく観点からも、必要不可欠と考えています。その流れを拡大させた上で、政治の世界へ逆流させたいと思います。

中国を仮想敵国に仕立て上げ、着々と戦争準備に突き進んではなりません。中国は敵ではありません。最大の貿易相手国です。更には日本文化の源泉である漢字や仏教などを教えて頂いた、切っても切れない大先輩の国なのです。私たち日本人は「日中友好こそ、日本の最大の安全保障の一つだ!」と言い切った田中角栄元首相の言葉を、心に刻むべき時です。

(3)神戸展ロゴマークと人類運命共同体

「一九四六神戸展」ロゴマークには、国交正常化50周年を超え(Beyond50)、中国の習近平主席が主導する「人類運命共同体」の一員となり、恒久的日中友好と「日中敬隣」実現への思いが詰まっています。

ゼロサム志向の米国型政治とは異なる、中国の「人類運命共同体・共存共栄」の外交理念は、日本国憲法にも合致しています。

米国の一極支配政治とは決別し、中国が主張する民主的国際秩序や、一带一路の政治経済秩序を模索すべき時代を迎えつつあると確信しています。

米欧日の諸国は、新自由主義的経済運営を早期に脱却し、世界的人権宣言や国連憲章の精神に回帰した国際協調の政治経済運営へと向かうべきなのです。

(4)私と「孫文先生や魏志倭人伝」の関係

私の出身地熊本県では、孫文先生の友人で、辛亥革命を支えた中国同盟会の宮崎滔天先生が有名です。滔天先生は「井戸を掘った人」として、中国・台湾でも代表的な日本人です。さて魏志倭人伝によると、約 1800 年前の中国・三国時代には、魏国は倭の邪馬台国と同盟していました。それと対立していたのが、呉国と狗奴国(くなく)です。狗奴国は熊本にあったとされ、その末裔は熊襲(くまそ)とされています。約 100 年前に実家の近くから出土したのが、写真の「鍔金神獸鏡」です。全径 14.65cm です。神の使いである獣を遇らって鑄造されています。白銅鏡の背面全体に分厚く金が鍔金され、現在でも金色に輝き、一時期は国宝でした。その後基準変更により現在は、国指定重要文化財に登録されています。もしかすると私の先祖は、呉の国から荒波を乗り越え熊本にやって来たのかも知れないのです。実家の家系は、大同元年(西暦 806 年)まで遡る事ができますので、満更フェイクニュースでもなさそうです。私は呉国王の孫権と繋がっていたのではないかと、胸の高まりを感じております。



寮生活を送った進学校のミッションスクール・ラサール学園では、中国史と漢詩が大好きでした。孫子や墨子など諸氏百家による懐の深い思弁には、今でも大きな学びがあります。墨子の平和主義・博愛主義は、今こそ全人類が心に刻むべき、また時代が求める先端的な平和思想だと思えます。更に紹興酒を堪能しながら、優しい音色の二胡を聴き、漢詩を誦じると心も和みます。これぞ徳治=王道の国の文化だと思えます。漢字、仏教、お茶、麺類や箸、道教の影響を受けた神道など、日本には沢山の中国文化が詰まっています。数千年に渡る日中の文化交流は、日本文化の源泉であり至宝と思えてなりません。敬愛する孫文先生は、呉の孫権や孫子の末裔と伺いました。2025 年は孫文先生の没後 100 周年です。1924 年の「大アジア主義の講演」も忘れてはなりません。私は移情閣(孫文記念館)友の会会員でもあり、創立 105 周年の神戸日華実業協会会員でもあります。東アジアの国々は、欧米の覇道ではなく孫文先生が主張された王道を歩み、そこに住む一人の日本人として、揺るがない日中友好と東アジアの平和構築に向けた交流が必要不可欠と認識しています。

(5)神戸華僑への感謝

中国と縁の深い神戸での絵画展開催に当たり、神戸華僑の皆様のご尽力には、誌面をお借りして改めて深謝申し上げます。神戸華僑総会機関紙には、神戸展ビラの差込みをさせて頂き、絵画展のお知らせにご協力頂きました。また、神戸中華同文学校や神戸華僑幼稚園では、生徒や児童と教職員向けに 1000 枚ものビラを配布して頂き、同校の生徒やご父兄の皆様から、4名のボランティア参加がありました。受付業務の他に、最終日の2時間にわたる搬出作業まで、大変熱心にお手伝い頂きました。

また、張文乃様には神戸華僑総会や生田神社に交渉し、日中文化交流の証となる「神戸南京町」と「生田神社」のそれぞれの獅子頭の展示にご協力頂き、会場の一画にコーナーを設置することができました。



(6)忘れてはならない日清戦争の負の遺産

世界の華僑の数は、約 4000 万人とされています。華僑が世界へ出ていった理由の第一は、貧困のためです。どうして貧乏になったかという、1894 年の日清戦争で中国が負けて、国の年収の3年分の賠償金を日本へ払うことになり、振興民族資本家や国民から税金を取ることが必要になりました。国民に払うことは何もできませんでした。このため、イギリスやフランスから借金を重ねて、日本に賠償金を払わざるを得なくなりました。この結果、国内の鉱山採掘権や鉄道敷設権などを譲り、更に関税までが、外国人の手に押さえられました。外国の力を背景にした軍閥間の戦争は絶え間なく、国は敗れ国民は生活の道を失い、家族は散り散りになり、外へ外へと出たのが華僑の歩んできた道です。

(7)華僑の二度にわたる大きな日本への貢献

1900 年の「奴隷解放令」のあと、アフリカの黒人奴隷にかわって、アフリカ、東南アジア、アメリカ大陸、カリブ海諸

島に苦力の形で多くの中国人労働者が送り込まれました。神戸の華僑はまだ歴史が浅く、1868年(慶応3年)の神戸港の開港からです。中国は先に長崎と、物資交流を通じて人間交流をした300年以上の歴史がありました。一方、神戸はまだ150年余りです。神戸港は開港と同時に中国人が外国船と一緒に入り、その頃に長崎に住んでいた中国人、十数人が神戸へ入りました。その十数人のなかには外国人の通訳や使用人、貿易関係というようにいろいろな人がいました。その後、さらに多くの人が入ってきました。

長崎から神戸へ来て、最初は通訳、そして貿易の仲介です。欧米人は上海を通じて中国と交流があったので、その関係が出来ていました。今から150年くらい前ですから、日本人は貿易の経験もありませんでしたし、貿易するような物資を出すことができませんでした。華僑は自由に貿易ができました。

その後、日本では輸出品と輸入品が分かってきました。華僑が中間に入り物資の斡旋をしました。当時、日本が輸出品は北海道産昆布が多かったため、函館には早い時期に港ができました。華僑は神戸で日本の物資を集めます。他の海産物ではアワビです。当時アワビは干して売るという習慣がなかったのですが、この頃アワビを干して輸出することを始めました。これらが華僑が神戸でやった仕事です。これが日本への最初の貢献です。

二度目は終戦からの5~6年間です。終戦後日本は、外国との交流は許されませんでした。その時華僑は、地縁などを使って海外と交流して、輸出入貿易に貢献しました。神戸にある華僑の輸出会社は当時、通産大臣から沢山の感謝状や表彰状などを貰っています。これは神戸華僑の歩みの一部です。

【お伝えしたい神戸絵画展の特長】

(1)神戸展特別サポーターの新設

特段の活動義務を設けず、神戸展PR役として「特別サポーター制度」を設けました。この取組みは過去4回の展覧会ではなかった画期的な試みとして高く評価されました。

実行委員会代表の安斎育郎博士の同僚や仲間を中心に、神戸展開催に対する賛同の和は広がり、元首相の鳩山友紀夫先生、引揚者では映画監督山田洋次様や歌手の加藤登紀子様、作家の澤地久枝様など105名の方々にご就任頂きました。

①特別サポーター加藤登紀子様の新曲制作と、8/14(日)BS TBSでの2時間特別番組

歌手の加藤登紀子様には神戸絵画展のイメージソング「果てなき大地の上に」を制作して頂きました。新曲のCDブックレットには、王希奇先生の許可を貰い「一九四六」が掲載されています。

神戸展会場の一面に「加藤登紀子コーナー」を設けるとともに、加藤登紀子様の新曲を終日流し続けました。

さて、デビュー50周年の歌手加藤登紀子さんの新曲「果てなき大地の上に」は、歌詞も曲も素晴らしい出来栄です。ジョン・レノンのイマジンも収録されています。加藤登紀子さんが日本語訳した歌詞は、オノヨーコさんの許可を貰い実現しました。今までは英語だけの歌でしたので、加藤様の取組みは日本初の快挙です。そのCDに「Special thanks 安斎育郎・宮原信哉」と記載されています。これも快挙だと自負しています。



また、8/14(日)21時よりBS TBSでは、満州引揚に関する2時間特別番組が報道されました。平和への思いを語ったのは、特別サポーターで引揚者の山田洋次監督と加藤登紀子様です。加藤様には大作「一九四六」の前で、新曲を披露して貰いました。私は制作現場に立会い、特別番組制作に協力できた事を光栄に思います。

また、8/14(日)21時よりBS TBSでは、満州引揚に関する2時間特別番組が報道されました。平和への思いを語ったのは、特別サポーターで引揚者の山田洋次監督と加藤登紀子様です。加藤様には大作「一九四六」の前で、新曲を披露して貰いました。私は制作現場に立会い、特別番組制作に協力できた事を光栄に思います。



また、8/14(日)21時よりBS TBSでは、満州引揚に関する2時間特別番組が報道されました。平和への思いを語ったのは、特別サポーターで引揚者の山田洋次監督と加藤登紀子様です。加藤様には大作「一九四六」の前で、新曲を披露して貰いました。私は制作現場に立会い、特別番組制作に協力できた事を光栄に思います。

②映画監督山田洋次様のコメント

山田監督の下記コメントは、ご本人の承諾を頂き、神戸展案内ビラやパンフレット、冊子等に掲載しました。「満州で少年時代を過ごしていた僕は、日本人が支配者のように振舞っていたことをよく知っています。だから中国人である王希奇さんという画家が、縦3メートル横20メートルの大作を描いて、あの悲惨な飢餓の中の引揚げを描き残すという大きな仕事をされた事に感動します。神戸展のご成功をお祈り致します。」

山田監督のコメントには、中国に対する贖罪の気持ちも反映されています。103名から寄せられた神戸展に対する感想文にも、同様の内容がありました。従軍経験のあった戦後派作家の故武田泰淳作「審判」での贖罪意識と併せ

て、最終項に日本人としての贖罪のあり方を述べます。

③ 特別サポーターお三方の色紙

ルポルタージュ作家の澤地久枝様・歌手の加藤登紀子様・元駐イラン大使で評論家の孫崎享様の色紙を、会場の一画に展示しました。



④ 特別サポーターで引揚

者お三方による、毎日新聞東京本社紙上討論会

写真は、私の提案で実現した7月4日に開催の標記紙上討論会です。左より澤地久枝様・山田洋次様・孫崎享様です。司会は毎日新聞東京本社の伊藤絵理子記者でした。8月12日(金)の毎日新聞全国版(夕刊)に掲載され、大きな反響を呼びました。神戸展告知記事も掲載して頂きました。

(1)日時:7月5日(火)13:00~15:35

(2)会場:立命館大学東京キャンパス会議室

(3)司会:毎日新聞東京本社 伊藤絵理子記者

【経歴】1979年生。2005年毎日新聞社入社。現在東京本社コンテンツ編成センター勤務。連載「記者・清六の戦争」で、第26回平和・協同ジャーナリスト基金賞・奨励賞と第15回疋田桂一郎賞を受賞、毎日新聞社刊「清六の戦争」

<https://dempa-digital.com/article/219815>



毎日新聞 2022年(令和4年)8月12日(金)夕刊 2

特集 **ワイド**

田満州国引き揚げ体験者が語る平和

一刻も早く戦争やめねば

山田洋次さん(90)

すべて話し合いで解決できる

孫崎享さん(79)

敗戦の惨めさ 想像絶する

澤地久枝さん(91)

田満州国引き揚げ体験者が語る平和

一刻も早く戦争やめねば

山田洋次さん(90)

すべて話し合いで解決できる

孫崎享さん(79)

敗戦の惨めさ 想像絶する

澤地久枝さん(91)

田満州国引き揚げ体験者が語る平和

一刻も早く戦争やめねば

山田洋次さん(90)

すべて話し合いで解決できる

孫崎享さん(79)

敗戦の惨めさ 想像絶する

澤地久枝さん(91)

(2)感動を呼んだ日本経済新聞文化面の記事

日経新聞で神戸展を紹介して貰いました。これも過去の絵画展を通して、初の試みとなりました。開催直前の8月29日(月)に、最終ページの文化面に掲載されました。他のマスメディアとは異なる切り口で、王先生への取材がされていて、全国から大きな反響がありました。

福岡県にお住まいのM様は85歳で、葫蘆島経由で

の引揚者でした。日経新聞の記事をご覧にな

って、お電話を頂きました。資料請求を受け、動画や写真付きの資料をメールや郵送で送付しました。M様からのお礼のメールを頂き、目頭が熱くなりました。ご本人の許可を貰い掲載します。

「ご多忙中にも関わらず、王希奇先生の絵画に関する多くの資料を頂き有難うございました。毎年八月前後、メディアは敗戦にまつわる記事で賑わいますが、私にとってはこの「一九四六」こそ最も心打たれた出会いになりました。あの時、葫蘆島埠頭で乗船を待つ引揚げ者の群れと同じ体験を、繰り返し動画を見ることによって、改めて希望と不安の入り混じった感情が蘇った次第です。「一九四六」展が宮原様のご尽力と、多くの著名な方々のご賛同を得て開催されたことは、素晴らしく有り難いことだと大変感謝いたしております。つきましては経費の一部(こ)月曜日、ご指定の口座に心ばかりお振り込みをさせて頂きたく、よろしくお願いたします。」

M様からは多額のご寄付を頂きました。私は人生意気に感じる九州男子ですので、85歳のM様のためにも、未開催の九州地区での開催に向け検討中です。

改めて思いました。芸術や文化にはこんな感動があるのですね。私はM様の感動的なメールを、日経新聞記者にも転送しました。感動が感動を呼び、新たな感動を求める起爆剤が、私の心に宿った瞬間でした。

(3)6/18(土)の「灘校」土曜講座

名門進学校「灘中学高校」で、出前講座を実施しました。講師は神戸絵画展に因んで、薛劍中国駐大阪総領事と、神戸絵展実行委員会代表で平和学の権威、立命館大学名誉教授安斎育郎博士(写真右)です。

- ①開催日時 2022年6月18日(土)9:00~12:20
- ②場所 灘校(神戸市灘区魚崎北町 8-5-1)
- ③対象 中2・中3・高1・高2の希望者 34名
- ④講師 1限目 薛劍 中華人民共和国駐大阪総領事
2限目 安斎育郎 立命館大学名誉教授、立命館大学国際平和ミュージアム終身名誉館長、工学博士

⑤講座のタイトル Beyond50! 祝 日中国交正常化 50周年記念事業 魯迅美術学院 王希奇教授『一九四

日本経済新聞 2022年(令和4年)8月29日(月曜日) 文化 40

「やつれ、被れ切った表情、着のみのままであどろり着いた中国沿岸の海。」(一)まで来れば、あとは故国日本へと安堵する一方、家族と生別れ、悲嘆に暮れた人もいた。ただ、無事戻っても、生活を再開できるか、多くは不安におののいていたに違いない。

私の絵画(一九四六)は太平洋戦争で敗れ、引き揚げ船への乗船を待つ約500人の日本人群衆を描いている。題名通り、46年に中国東北部に送られた多くの日本人の引き揚げが始まったところの歴史に取材した作品だ。一人ひとりの表情を可能な限りの描き分け、縦3尺、横20尺というサイズになった。私の作品の中でも巨大では群を抜く。舞台は中国・遼寧省の葫蘆島。大陸に取り残された日本人280万人のうち、46年9月までにこのから105万人が送還されたという。

私は魯迅美術学院(遼寧省)で油絵を教える傍ら、歴史を題材にとった絵画を描いてきた。日本

加害・被害超え引き揚げ描く

◇1946年の日中関係史を大作に、戦争の不幸と平和訴え◇ 王 希奇



引き揚げ船への搭乗を待つ群衆を縦3尺、横20尺の大きさで描いた

でも人気の高い三国あひの「赤星の戦い」では合作を手掛けたこともある。「一九四六」を制作するきっかけは、インターネットで見つけた一枚の写真だった。

年輩も行く船員の子がぼろぼろの服をまと、大切うに襦を抱えている。よく見ると勇姿した女の手のような、困惑したような表情が印象的だった。箱の中は家族の遺骨かもしれない。

興へると、ある史実に行き着いた。戦後の60年生まれの私が幼い頃、年配者からたびたび話だけは聞いていた中国で「遣送」「還送」と呼ぶ日本人引き揚げた。資料を集めながら、被害者でもあった引き揚げ者が半腕を盡くした体験の



残さを身にしみて感じ、絵画しようと思いついた。

中国人画家である私が描く「一九四六」は、これも「加害者」(侵略者)の敗走と「被害者」(被侵略者)の戦後生活を描いた。日本ではこれまで、戦争を描いた人たちは「運命を弄られた日本人の家」である。しかし、国境を越え、このように不幸や不条理は世の全ての戦争の犠牲者、被害者になる。作品を通じて訴えたいのはあくまで平和の大切さ、生命の尊厳だ。

制作には半年かかった。絵心と筆にまかせて書き出したものの、新しい資料に出くわすたびに、

よりやく2015年に完成し、日本ではこれまで、に東京都内や京都府舞鶴市など、4カ所で公開された。

31日から9月4日まで、は兵庫県立美術館原田の森キヤラリ(神戸市)で公開される。日本では5カ所目となるが、今回はオンラインの官展信

哉さんの尽力で、実際の映画監督の山田洋次さん、漫画家のちばてつやさん、歌手の加藤登紀子として名を連ねてくださった。草の根の日中友好の一端を担えるのであれば、この上ない喜びだ。

ワン・シーチー(画題)

六』神戸展(1946年旧満州(中国東北部)引揚絵図)～『戦争・平和・難民 & 愛と償いの絵画展』～『日本中国の過去・未来 & 戦争と芸術』

⑥講座内容(灘校からの要請を受けて制作した生徒への案内文)

中国で著名な歴史画家で、魯迅美術学院王希奇教授は、構想から完成まで5年半の歳月を掛け2015年に、縦3m横20mの大作「一九四六」を完成させました。1946年に日中戦争の敗戦で難民となった中国残留日本人が、米国の船で帰還する様子を描いた大きな作品です。王希奇教授の作品展が、日中国交回復50周年記念神戸展として8月31日～9月4日に兵庫県立原田の森ギャラリーで開催されます。

さて、上記の案内文で灘中高生の皆様は、様々な疑問が湧きませんでしたか？

a)歴史画家とは？ b)中国は日本に攻められたのに、王先生はなぜ難民となった日本人を描いたの？ c)どうして米国の船で帰還したの？ d)10年後に中国の国力は米国を上回るの？さて、皆さんは隣国の中国をどれほどご存知でしょうか？

30年間にわたって日中外交に携わってきた薛劍駐大阪総領事からは、主に中国の歴史や将来についてのお話があります。立命館大学名誉教授安斎育郎博士からは、芸術と戦争をテーマに自分の価値観と合わない状況に置かれた時、どう生きるかという普遍的な課題について問題提起します。

予備知識を持って「一九四六」を鑑賞すると、絵画鑑賞の見方もグレードアップすると思います。3時間の授業で、ご一緒に日本と中国の歴史や芸術の勉強を致しましょう。



(4)日本人引揚の歴史的経緯

神戸展 HP のメニュー画面に、「米中協力で実現した日本人難民の帰国」を設け、そこに立命館大学の佐藤量博士による論文「戦後中国における日本人の引揚げと遣送」を掲載しています。

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_25-1/RitsIILCS_25.lpp.155-171SATO.pdf

中国からの日本人引揚事業は米国主導で行われ、1945年12月には米国と中国国民党・中国共産党との間で、日本人引揚げに関する「三者会議」が開催されました。

中国国内では国共内戦を一時停戦とし、日本人難民のために陸路が確保されました。米国は船舶で海路を確保し、帰還事業を推進しました。米中協同による日本人難民の帰還事業には、心より敬意を表するものです。なお、満州からの邦人引揚のために、米国が提供したLST輸送船(戦車揚陸艦)は85隻、リバティ輸送船(戦時標準船)は100隻、病院船は6隻でした。

(5)後援名義許可申請への対応

①外務省 2022年1月28日付で当委員会に対して、アジア太平洋局中国・モンゴル第一課から、後援名義使用不許可の連絡があり、林外務大臣からの通知も添付されていました。申請から約50日経過しての連絡でした。

②厚労省 社会援護局援護企画課中国残留邦人等支援室帰国・受入援護係からも、申請から約50日経過して「個人の絵画展には後援名義許可は出さない」との理由で、後援名義使用不許可となりました。

③中国駐大阪総領事館 当初の約束通り後援名義許可を頂きました。約束を守るという事は、過去の言葉に忠実という事であり、歴史に対して謙虚である事です。歴史を隠蔽したり脚色する態度ではなく、中国側の対応は極めて知性的で紳士的な大人の振舞いと言えます。

かつてGHQの最高司令官マッカーサー元帥は、米国公聴会で「日本人は12歳」と発言しました。上司に付度ばかりして同調圧力に流されるポリシーなき日本人の幼児性を見た思いがしました。彼らはまるで年齢不詳の幼児の様な印象でした。

(6)私の「一九四六」への思い

①ピカソの発言を踏まえ「一九四六」に描かれている「蛍」について

特別サポーターの映画監督 山田洋次様にお会いした折、王希奇教授が敢えて「蛍」を使って、モノトーンの色調の中に明暗を表現している事を説明しました。私の拙い説明を大変熱心に聞いて頂きました。大作「一九四六」に描かれた、暗黒の画面に浮かび上がる無数の白くて小さな灯火は、自ら光を放つ「蛍」を表しています。王教授がこの「蛍」を通して表現したかった事は、人間が発する生きる喜びと希望と伺いました。敗戦による悲惨な難民生活を終え、日

本帰還の喜びと期待を表現しているのです。

また、日本国内においてお盆の頃まで生息する「蛍」は、淡い灯を放ちます。日本人の私は、絵画に描かれた点滅する蛍の淡い光に、寧ろ日本に帰る事ができなかった 50 万人近い残留日本人や、集団自決をした死者の無念さとその魂を感じざるを得ません。その意味ではこの大作は、極めて仏教的かつ宗教的な絵画と言えるのではないのでしょうか？

日本ではヘイケボタルやゲンジボタルのネーミングがあります。現在でも地域によっては、「蛍」と亡くなった人の魂を結びつける習俗は残っています。お盆の頃に点滅しながら淡い光を放って飛び回る「蛍」からは、死者の霊をイメージする事ができます。

ピカソは「絵は作者の欲求がそこに表そうとしたよりも、ずっと多くの事を表現する。作者はしばしば自分で予期しなかった結果に驚かされる。」と述べています。

王先生は、日本や日本人に償いを求めてはいません。しかし日中戦争の被害者でもある中国人の子孫である王先生が、加害者である日本人の子供たちが難民となった写真をご覧になって、被害と加害を齎す戦争の実相を大作として仕上げられた事に、一人の日本人として王先生への尊敬と感謝の念をお伝えしたいと思います。

東アジアの人々との尊厳ある和解に向け、隣人への償いのあり方が日本や日本人に問われていると思わざるを得ません。私には「蛍」が象徴するのは希望だけでなく、日本に帰還出来なかった人々の無念さだと述べました。このような感じ方は、王先生には全く思いも寄らない事ではないでしょうか？正にピカソが指摘している様に、画家が予期していなかった事に該当すると思います。

また、山田監督から頂いたメッセージは、前述の通り神戸展ビラに記載しています。このメッセージを参考に、最終的に絵画展のタイトルを「戦争・平和・難民 & 愛と償いの絵画展」としたのは、日本の戦後処理に対して日本及び日本人としての償いのあり方を、自問自答する必要があると認識しているからです。

私はこの大作を、日本人の心と魂を揺さぶる世紀の大傑作と評価しています。油絵と墨絵の合作による新しい画法を採用した事により、白黒写真で歴史を振り返る時の様な臨場感を感じさせてくれます。悲惨を極めた敗戦前後の歴史的真相が胸に迫ってきます。だからこそ戦争体験(加害者)二世として、未来永劫の日中友好と日中不再戦の思いを心に刻みたいと思います。



②描かれた海から連想すること

葫蘆島港の海は、大作の画面の右奥に描かれています。黒い海は明治以降の日中間の暗黒の歴史を、その左側に描かれている光が差し込む海は、日中両国民の友好を象徴している様に思います。揺れ動く波は日中間に横たわった激動の歴史を物語っている様に思います。

文献で分かっているだけでも、2000 年以上に亘り、日本と中国は海を介して繋がりました。これからも大切な隣国として、神戸展のスローガンである「日中敬隣」の志を忘れてはならないと思います。海は日本と中国の歴史の「生証人」です。この海で再び紛争を起こしてはなりません。海を介して繋がっている日本と中国の友好も、未来永劫にわたり海と同じく繋がって欲しいと考えています。

③絵画の焦点を複数化

横 20 メートルの大作なので、絵画の焦点が複数に置かれています。歩きながら鑑賞すると、あたかも自分が難民になった様な気分になるのはそのためです。

また、描かれている 500 人の邦人難民には明暗があります。引揚げた後の生活を象徴しているのではないのでしょうか。帰還して大変な苦労を重ね、山林を開墾し農地として生活が安定した途端に、減反政策に翻弄されただけでなく、農地が放射能により汚染された福島県の満州引揚開拓農民の存在を忘れてはならないと思いました。この事実は特別サポーターの早川篤雄住職から伺いました。

④構図の素晴らしさ

絵画には 4 隻の巨大な船舶が描かれています。1 隻は日本の船舶と分かります。残りは米国の大型船舶ではないでしょうか？右奥の島の先端に停泊している船舶に乗り込もうとして、船のタラップを登る邦人難民を目にする事ができます。この階段こそ希望に繋がる「天国への階段」と捉えることができるのではないのでしょうか？

絵画の右奥では、島の先端で海へと続いており、安定した三角形の構図となっています。その右の海は画面の広がりだけでなく、上記で述べた通り歴史の繋がりを連想させるあしらいが施されています。また、画面上部や右奥の海をあしらうことにより、奥行きを感じることができます。

手前の 2 隻の船舶へは乗り込みが終わり、これから出航するのでしょうか？ また、絵画の中心部には、王先生の心に刻まれた「遺骨を抱いた男装の少女」が描かれています。

(7) 薛劍総領事の開幕式

来賓挨拶が 2022 年 9 月 3 日付人民網(人民日報 website)に掲載

中国語の原文を神戸展実行委員会有志で日本語に翻訳しました。格調高い挨拶なので全文掲載します。

「徳を以て怨を晴らす」歴史は世に稀であり、より多くの人々が心に刻むに値する

——薛劍駐大阪総領事が「一九四六」神戸絵画展開幕式に出席——人民網報道 (2022.9.3)

中国大阪総領事館ホームページのニュースによ

れば、10 年程前に魯迅美術学院の王希奇教授は、「一九四六」大型歴史題材絵画を創作する志を立て、5 年半の歳月をかけ「葫蘆島大送還」という中日関係史上、重要な意義を持つ歴史的事件を描き切った。この長さ 20m×高さ 3m の巨大油絵作品は、2017 年より東京・仙台・舞鶴・高知などの地で連続的に展示され、数多くの日本人が引き寄せられ観覧に来ていた。今回、中日国交正常化 50 周年記念事業として、2022 年 8 月 31 日から 9 月 4 日までの間、兵庫県立美術館原田の森ギャラリー(神戸市)で展示されている。

8 月 31 日薛劍大阪総領事は「一九四六」神戸展開幕式に招待され、テープカットに参加し挨拶を述べた。開幕式には前兵庫県知事井戸敏三氏、神戸市国際局長壇特竜王氏、元京都府立大学学長・福知山公立大学名誉学長井口和起先生、元帝塚山短期大学学長森一貫先生、神戸華僑代表者(神戸華僑総会会長陳昆儀氏、移情閣(孫文記念館)

8 / 31 (水) 「一九四六」神戸展・開会式 次第

場所：兵庫県立原田の森ギャラリー2階大展示室

時刻	時間	項目	担当	備考
10:00	1分	開会挨拶	宮原事務局長	
10:01	3分	主催者挨拶	安斎育郎代表	
10:04	3分	ご来賓紹介	宮原事務局長	中華人民共和国駐大阪総領事 薛劍 様 神戸華僑総会会長 陳昆儀 様 (公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構特別顧問、 前兵庫県知事 井戸敏三 様 神戸市長室国際局長 壇特竜王 様 小松電機産業 人間自然科学研究所 会長兼社長 小松昭夫 様 福知山公立大学名誉学長・元京都府立大学学長 井口和起 様 NPO法人国際音楽協会理事長 張文乃 様 移情閣(孫文記念館)女の会会長 林岡福 様 元帝塚山短期大学学長 森一貫 様 (順不同)
10:07	3分	ご来賓挨拶	中華人民共和国駐大阪総領事 薛劍 様	
10:10	(公財)ひょうご震災記念21世紀 研究機構特別顧問、前兵庫県知事 井戸敏三 様			
10:13	福知山公立大学名誉学長、 元京都府立大学学長 井口和起 様			
10:16	元帝塚山短期大学学長 森一貫 様			
10:19	1分	テープカット	薛劍 様、井戸敏三 様、井口和起 様、 小松昭夫 様、安斎育郎代表 (順不同)	
10:20	3分	写真撮影		
10:23	5分	ご挨拶披露	宮原事務局長	
10:28	1分	閉会挨拶	宮原事務局長	

(注) 9:30 から南駐車場入口よりご入場できます。尚、正門(北口)は10:00 開館です。

友の会会長林同福氏、NPO 法人国際音楽協会理事長張文乃氏)及び、主催者代表の立命館大学名誉教授安斎育郎博士と事務局長宮原信哉氏などが出席した。当日は 400 名以上の人々が来場して観覧した。

薛劍総領事は挨拶で、以下のように指摘した。「一九四六」が描いている「葫蘆島大送還」が生じたのは、抗日戦争が終結して間もなくである。日本軍国主義の侵略戦争が中国に、甚だしい災難と痛苦をもたらしたにもかかわらず、中国人民は人道主義の精神に基づいて種々の困難を克服して、日本人移民や捕虜の大送還のために、多大な人力、物力と財力による支持を提供した。この「徳を以て怨を晴らす」歴史は世に稀であり、より多くの人々が心に刻むに値する。

薛劍総領事は更に、習近平主席は「歴史を心に刻むのは恨み続けるためではなく、共に戒めとするためである。歴史を伝承するのは過去に捉われるためではなく、未来を切り開いて平和の松明を代々伝えていくためなのだ」と強調していると述べた。そして以下のように続ける。「戦後、数多くの日本の心ある人々は歴史の教訓を心に刻み、平和を発展させる道を歩もうとし積極的に努力をしてきた。しかし、依然として一部の人々は、侵略の歴史を正しく認識し深く反省することができず、アジアの隣国と国際社会の信頼を得ることができていないどころか、却って常に「被害者」を気取る否定的な言葉と行動がしばしば隣国を含む広大なアジア人民の感情を傷つけている。



現在、この歴史の体験者や目撃者と証人は減少し続けており、本来は伝承されるべき歴史の記憶も次第に風化している。こうした現状が人々を憂慮させているのは間違いのない事実である。国交正常化 50 周年を迎えた際に、中日関係は再び十字路に立ち至っている。歴史を正しく認識することは、中日関係を発展させる政治的前提であり基礎である。日本が歴史の事実を直視し、歴史の教訓を汲み取り、今までに歴史問題について表明してきた態度と約束を適切に遵守し、それによって平和の道を歩むことを希望するものである。」

薛劍総領事は、「この『一九四六』という作品は我々に、戦争には勝者はいない。苦しい目に遭うのは、いつも人民なのだと告げている」と語った。そして更にこう述べた。「平和友好こそが、最も有効で最も信頼できる安全保障なのだ。私は今回の絵画展が、より多くの日本人の人々に、特に若い世代に戦争の真相を理解させ、正しい歴史観を樹立させ中日平和友好の確信を強化させて、人類運命共同体を構築するという崇高な目標に向かって、共同して絶え間なく努力することを期待している。」

各界の来賓からは、「『一九四六』は日本ではほとんど知られていない一つの重要な歴史を描写している。巨大な油絵は人々に、強烈な視覚的衝撃を齎すとともに、深く考え込まざるを得ない状況に追い込む。我々に、両国の一世代上の政治的指導者たちの、遠見と卓識をより深く理解させてくれる。日中関係 50 年が獲得してきた、容易ではない発展と成果を大切にしたい」といった内容が次々と語られた。

元々我々には、歴史の事実を次世代に伝え、戦争を反省し歴史を心に刻み、決して悲劇を繰り返させない義務がある。

セレモニー終了後、薛劍総領事が SNS 上で、絵画展の状況と日本人移民・捕虜の大送還の歴史的背景を紹介したところ、多くの日本人フォロワーから、「中国人の先生が私たちに、日本では学ぶことのできない知識を教えて頂いた。心より感謝します」「日本人として私は、深いお詫びとお礼の気持ちを表したい」「77 年前の中国は人道主義精神に基づいて、敵国の遺児や孤児を助けたのに、現在の日本は未だ朝鮮学校の無辜の児童を差別視している」「戦後、日本人の遺児を養ってくれた中国の友人たちに、心より感謝する」等々といった返信が寄せられている。

改めてお伝えします。薛劍総領事は「一九四六」神戸展開幕式で、習近平主席の発言に言及し「歴史を心に刻むのは、恨み続けるためではなく、共に戒めとしていくためである。歴史を伝承するのは、過去に捉われるためではなく未来を切り開いて、平和の松明を代々伝えていくためなのだ」と強調しました。更に「平和友好こそが、最も有効で信頼できる安全保障なのです。私は今回の神戸絵画展が、より多くの日本人の人々に、戦争の真相を理解させ正しい歴史観を樹立させ、中日平和友好の確信を強化させて、人



類運命共同体を構築するという崇高な目標に向かって、共同して絶え間なく努力することを期待しています」と述べている点を強調したいと思います。

(8)感想文集から日本人の中国への贖罪意識を考察する

①兵庫県立原田の森ギャラリー

神戸展会場は、日本芸術院会員で文化勲章受章者で、早稲田大学文学部校舎や日生劇場などを設計した、故村野藤吾先生による兵庫県立原田の森ギャラリー大展示室としました。この展示室は、天井も高く日本でも有数の面積を誇り、幅 25 ㍎奥行き 45 ㍎と広大でした。大展示室の中心部には、50 脚の休憩用の椅子を用意しました。これはご年配の来場者ご自身がゆっくりと絵画と対話しながら、しみじみと大作を鑑賞して貰いたいとの配慮からでした。

② 感想文と「藤田嗣治画伯」「ヨハネの黙示録」「審判」と「罪と罰」

大展示室の中央に設置した感想文コーナーには、早くから沢山の人が並び、行列ができていたのには驚きました。「一九四六」を鑑賞し、衝撃的な思いを伝えたい人が沢山いらした事を、主催者としてお伝えしなければなりません。

103 名の感想文には、敗戦前後の生々しい真実が記載されていました。2 歳の妹様が母親の背中で餓死し、引揚船で茶毘に伏すもお骨まで灰になった話が記載されていました。また、引揚船に乗るために葫蘆島に向かう最中、銃撃戦で父親が殺され、二人の弟は餓死し、母親と二人で三人の遺骨を抱いて帰国した話も記載されていました。いずれも 70 歳代後半の方々の感想でした。また、中国に対して謝罪や感謝の言葉もありました。前述の山田洋次監督のコメントには、中国や中国人への贖罪の気持ちが伝わってきます。

私は 1943 年作の「アツツ島玉砕」や、1945 年作の「サイパン島同胞巨節を全うす」などを描いた、藤田嗣治画伯の戦争画を思いました。藤田画伯の戦争画には鬼気迫る迫力があり、戦前の多くの日本人は涙を流し絵画の前で合掌したそうです。こちらも白黒の色調で描かれていました。今回も大作「一九四六」に向かって、合掌する人をお見かけたのでした。私は期間中、20 回にわたり「一九四六」の説明をしました。その際、涙を流しながら合掌して、説明を聞いて下さる方々を拝見しました。その合掌は戦士した日本人に対するだけでなく、大きな被害を与えた中国人に対する合掌だったとも思います。

薛劍中国駐大阪総領事が開会式で仰った通り、日本人は戦争加害者である事を忘れてなりません。

戦後派作家の武田泰淳ほど、戦争に加担したという犯罪的な罪の意識と、贖罪観の強い作家は稀だと思います。1947 年発表の『審判』は、一兵卒として中国参戦した、武田泰淳自身の戦場での体験告白でもあり、誰にも裁かれない自分の犯した戦争犯罪を自身の手で裁くために描かれた問題作です。題名の『審判』は、新訳聖書「ヨハネの黙示録」に由来し、神から敗北者へ下された破滅の審判が含意されています。武田泰淳の考えた破滅は、国家単位でなく個人一人一人が向き合わねばならないという、強烈な贖罪意識が根底にあったのです。盟友で作家の堀田善衛によると、武田は「審判」の主人公・二郎と同様に、日本へ引き揚げずに中国に残留し、贖罪の証を残す覚悟を持ち合わせていたと記しています。この作品はドフトエフスキーの「罪と罰」で、二度目の殺人を犯した後に贖罪意識を痛感し、懺悔し恋人に告白した主人公のラスコーリニコフと、同じ立ち位置にあるのではないのでしょうか？

③ 絵画展のタイトル「愛と償いの神戸展」

前述の山田洋次監督のコメントや、「審判」の二郎や「罪と罰」のラスコーリニコフの贖罪意識を、日本人として忘れてはならないとの思いから、絵画展のタイトルに「償い」を加えました。「愛」を添えたのは、加害者である日本人を描いて頂いた、王希奇先生への感謝の気持ちからです。

日中友好と日中不再戦を心に誓い、史記の司馬遷が述べた故事「前事不忘 後事之師」に覚醒した絵画展でした。

《Beyond50!! 🇯🇵 🇨🇳 日中国交正常化 50 周年記念事業 魯迅美術学院 王希奇教授

『一九四六』神戸展(1946 年旧満州(中国東北部)引揚絵図)～『戦争・平和・難民 & 愛と償いの絵画展』～

実行委員会 (代表:安斎育郎博士)事務局 宮原信哉

☎09037146228 Email: smyahara0405@gmail.com

